

2022 年産水稻の作柄について

農業革新支援担当 村田大樹

1 本年気象の特徴

本年の水稻栽培期間の日平均気温は、梅雨時期の6月下旬から7月上旬に、平年を大きく上回る気温を記録し、降雨もほとんどありませんでした。さらに7月下旬から8月上旬にかけて気温が高い傾向が続きました。(図1, 図2)

2 作期ごとの生育概要

早期栽培では田植作業は順調に進捗し、活着も良好でした。生育前半は6月上旬から気温が低く推移したことから、分げつの発生がやや停滞し、その後もその傾向が続き茎数は平年より少なくなりました。6月下旬から7月上旬まで高温多照が続き、出穂期は数日早まりました。その後も8月上旬まで気温は高く推移したことから、成熟期も数日早まりましたが、登熟期間が高温に遭遇した影響で、白未熟粒等の高温障害が発生しました。収量は茎数の減少の影響を受け、平年よりやや減収となりました。

早植栽培では育苗期間中に一時的に低温に遭遇し、生育がやや緩慢となりました。生育前半は6月上旬から中旬まで気温が低く推移し、分げつが抑制されましたが6月下旬から高温が続いたことで生育は促進され、平年並の茎数となりました。また、6月下旬からの高温により肥料の吸収と利用が早まり、葉色が平年よりも淡く推移しました。出穂期は中早生種では数日早まりましたが、晩生種では平年並でした。成熟期は数日早まりました。登熟期の8月中旬から9月上旬は曇雨天が続き、日照不足により玄米品質の低下を招いた地域もありました。収量は平年からやや多い傾向でした。

普通期栽培では6月上旬に麦作地域に降ひょうがあり、子実を含む麦わらをすき込んだ一部の水田では好天による有機物の急激な分解に伴う土壌の強還元化により初期生育の停滞などの影響が見られました。その後生育は回復し、8月上旬までの気温は平年より高く推移し、出穂期も数日早まりました。

登熟期の8月下旬以降断続的に曇雨天が続き、気温も平年を下回る時期があり成熟期は数日遅れました。収量は平年並からやや多い傾向でした。

農水省が12月9日に発表した埼玉県の作況指数は「101」の平年並でした。

3 農産物検査結果 (11月30日現在)

農水省が発表した等級別検査数量のうち埼玉県の水稲うるち玄米等級比率は1等が63.9%でした(表1)。同じく銘柄別検査数量のうち埼玉県うるち玄米等級比率は、「コシヒカリ」の1等が16.3%と低く、「彩のかがやき」は1等が92.1%と高くなりました(表2)。

「コシヒカリ」は白未熟粒等により品質低下を招きました。また、一部の地域ではカメムシ類による被害の発生も平年より多く認められました。

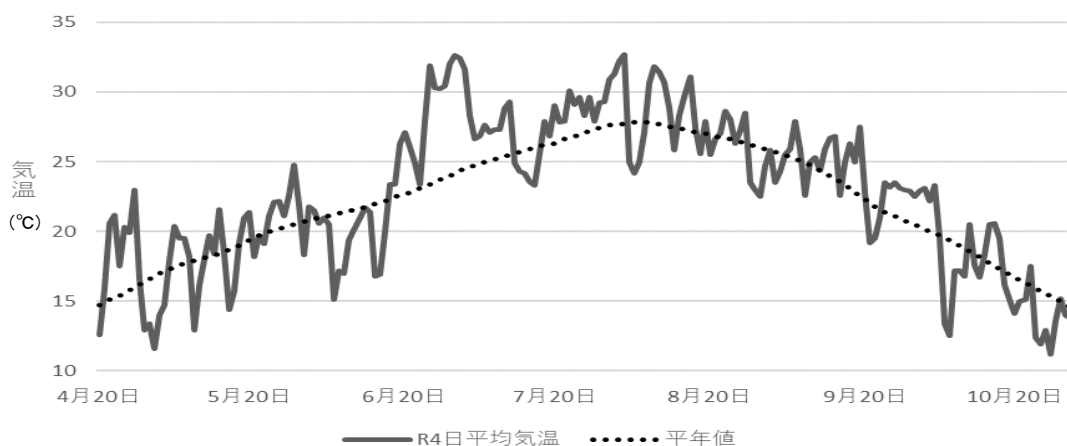


図1 水稲栽培期間中の日平均気温の推移

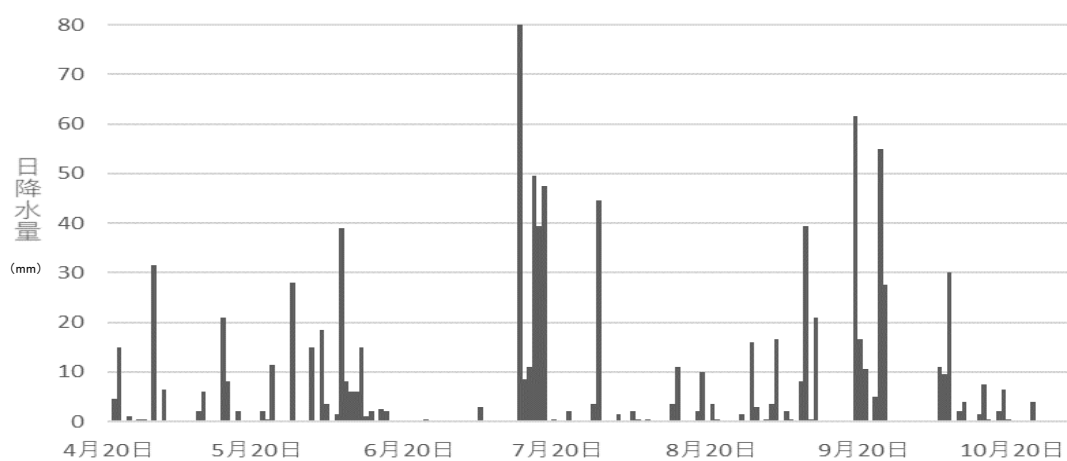


図2 水稲栽培期間中の降雨量の日合計の推移

表1 2022年産(令和4年産)等級別検査数量のうち埼玉県の水稲うるち玄米等級比率

等級区分	1等	2等	3等	規格外
比率	63.9%	27.9%	6.3%	1.8%

(出典:農林水産省 令和4年産米の農産物検査結果 令和4年11月30日現在(速報値))

表2 2022年産(令和4年産)銘柄別検査数量のうち埼玉県うるち玄米等級比率

品種名	1等	2等	3等	規格外
コシヒカリ	16.3%	59.1%	21.9%	2.8%
彩のきずな	71.8%	26.2%	1.7%	0.3%
彩のかがやき	92.1%	7.2%	0.6%	0.1%

(出典:農林水産省 令和4年産米の農産物検査結果 令和4年11月30日現在(速報値))